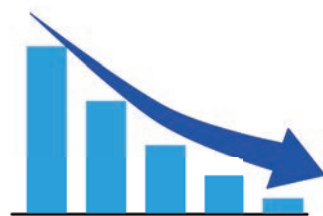


消滅の危機に瀕するPM友の会沖縄県支部 —現状と課題—

理事 宮城 吉通

日本心臓ペースメーカー友の会沖縄県支部（以下、沖縄支部）は、1970年1月10日、ハワイ大学のビンセット・ケリー博士の指導のもと、全国に先駆けて中部病院内に発足した「オキナワン・ハート・ペースメーカークラブ」が、「沖縄心臓ペースメーカー友の会」として10年余にわたる「日本心臓ペースメーカー友の会」の会友を経て、1982年7月3日、PM友の会本部の物心両面にわたる絶大な援助と、発足時の沖縄支部役員の奉仕の心に満ちた努力、顧問医の熱心な指導、PM植込み者や心臓に障害を持つ患者とその家族の大きな期待を担って、「日本心臓ペースメーカー友の会沖縄県支部」として発足してから、設立40周年記念の節目を迎えます。

しかし近年は、スマートフォンなど情報収集機器の急速な発達と普及で、PM植込みによる不安感の減少や価値観の変化などにより組織への期待度が減退し、新規加入者が大幅に減少している事を憂慮し、以下に示す現状分析を行った結果、沖縄支部の存続に強い危機感をいだき、会員の皆様からの提案と真剣な議論を期待している者であります。



危機感を煽っているようにも思えるでしょうが、現実を直視しその対策を急がなければ「取り返しがつかなくなるのではないか」と憂い、次のような拙文をしたためてみました。

（１）組織の基盤である会員の減少と高齢化の加速

沖縄支部の活動が活発であった頃、2014年度当初の会員76人は、2019年には68人にまで緩やかに減少していた中で、新型コロナウイルスの世界的大流行により2020年度末は54人にまで激減。2021年度も退会者が多く、年度末には43人以下まで減少していると推察される中で、会費未納者の傾向などを勘案すると、2022年度中には40人を割り込むのではないかと危惧されます。

次に2021年度当初の会員の年齢構成をみると、100歳2人を含む90歳以上が8人であるのに対し、70歳未満の若年層は5人に過ぎず憂慮すべき事態になっ

ております。

会員の平均年齢は、これまで変動が少なかった2014年度当初の76.9歳から、2022年度には79.8歳となり、この8年間で3歳も高齢化が進んでいますが、この傾向は今後も変わらないものと考えられます。

(2) 高齢化の進行による役員補充の停滞

ここ数年は高齢や多忙などにより役員の引き受け者が減り、旧役員が引くに退けず継続して沖縄支部を運営している状態が続いておりますが、現状のままでは役員の補充が途絶え、組織の存続が危ぶまれます。

このような状況が改善されず、2022年度以降も現役員8人の再任が続くと、今後2年以内に80歳代3人、70歳代後半2人、74歳2人になり、2年後における役員の平均年齢は75.9歳。体力的に限界に近付きつつある事を認識しなければならないと思います。

使命感と気力で活動している現役員も、2年後は80歳代3人の内2人は遠方から役員会に出席することになり、近い将来運転能力の低下や家族の意見などで車の運転がかなわず、バスを乗り継いでの役員会出席を強いられるのは十分に予測できません。



以上のような現状が早急に改善されないと、沖縄支部の存続が危ぶまれます。こういう悲観的な予測を阻止し、再び活発な沖縄支部を取り戻すためには、新会員の加入が絶対条件なることは言うまでもないと考えますが、考えすぎでしょうか。

末吉公園にて役員会



後列左から、金城茂さん・久高さん
宮城さん・八木さん
前列左から、金城トシ子さん・平井さん